

## 新たな社会を夢みて

佐敷中学校 三年

嶺井 傑

僕の祖父母は戦争体験者だ。毎年、慰霊の日が近づくと、普段は優しく慈悲深い表情をする祖父母の目が、暗く悲しい色に染まる。特に、祖母は沖縄戦で、身近な人を亡くしている。祖父母の世代だとそんな人は多くいるのかもしれない。それでも、身近な人を亡くした悲しみは、その他大勢の一人と、ひとくくりにはできないものがある。

戦争で大事な人を失ったと聞くと、激しい銃撃戦や空襲などをイメージする人が多いような気がする。しかし、戦争で命を落とすのは、なにも爆撃や銃弾などといった武力によるものだけではない。祖母の妹は、栄養失調で幼い命を失ったのだ。果たしてそれは、戦争によって命を落とすと言えないだろうか。

僕は、そうではないと思っている。爆撃などによってあっという間に命を奪われた人も、当の間違った教育の下で、自らの命を絶った者も、そして、祖母の妹のように希望あふれる未来を見ることなく、空腹に耐えながら静かに息を引き取った人も、みんな「戦争」によって、その尊い命が奪われたのだ。

事実上、太平洋戦争は終結したことになっている現在。僕たちは、今まさにこの時代に生まれ、生きている。突然爆撃に襲われる心配はなく、水道の蛇口をひねれば、簡単にきれいな飲み水が手に入る。また、食べることにに関して言えば、丸一日何も口にしない日はない。そう考えると、ある意味平和と言える。

ある夕食時、食器を片付けようとした僕に、

「戦争の時は、何も食べるものがなかったのにね。今のあんたなんかはとても贅沢だよ。」と、祖母が言った。僕の手には、夕飯の残りが少し入ったお椀があった。この時の僕の正直な気持ちは、また、いつもの苦労話かという感じだった。でも、そうではなかった。祖母は、六十年以上経った今も、栄養失調で亡くなった妹に対して、申し訳ない思いを抱えていたのだ。食べるものがなく、ひたすら空腹に耐えながら、静かに息を引き取った妹の最期を祖母はなかなか語ろうとしない。でもそんな祖母の気持ちをくみ取ることでもできなかった僕は、自分の手にある食べ残しの

ご飯を見つめながら、ただ謝ることしかできなかった。

祖母との一件があつて以来、当たり前のことかもしれないけれど、僕は食事を残さないように心がけている。妹の死という悲しい思い出を通して、僕に食べることの大切さを伝えようとした祖母。そんな祖母の気持ちを考えると自分の行動が恥ずかしくなった。そして、改めて、戦争について考え直さなければならぬと思った。

「平和とは一体どんな世の中を言うのか。」僕がまず考えたのは、ここ沖縄の現状に向き合うことだと思った。現在、沖縄には「負の遺産」として米軍基地が置かれている。訓練と称した騒音は、地域住民にとっては武力による威嚇と同じことだ。また、軍人による女性への暴行事件や飲酒に絡む事件・事故も多い。「負の遺産」は最早「負の連鎖」となって、沖縄県民の生存権を脅かしている。そして昨年、また一つ連鎖が続いた。オスプレイの配備である。その安全性が確認されないまま、この沖縄の空を自由に飛び回るのだ。

「日本は、戦争で負けた。だから基地が置かれるのは仕方ない。これは、敗戦国の象徴なのだ。」僕は、今までそう思っていた。でも、そうではない。基地は、敗戦国の象徴なのではない。力で人を治めようとする武力社会の象徴なのだ。そんな世の中を平和だとは言いがたい。そして、それは何も沖縄だけの話ではない。核兵器所持を自慢のように他国にアピールし、威嚇する国や中立国と言っても軍隊を持つ国もある。結局、今の社会全てが武力による統治なのだ。

「平和」について考えようとする、武力による統治が僕の前を遮る。でも、ぼくはここで新たな世の中を夢見たい。武力による統治ではなく、思いやりや真心で治める世の中を。人は誰にだって欲はある。でも、自分の欲望よりも、もっと大切なことがあるということに気づいて欲しい。天から与えられた尊い命を全うし、誰もが安心して安全に暮らせる世の中で、お互いに思いやりを持って人間関係を築く社会。そんな社会にこそ「平和」が見えるのではないかと思う。

僕は今、中学三年生。たった十四歳の僕に、国を治めたり、集団をまとめる力なんてない。でも、身近な人に思いやりや真心を持つて接することはできる。そして僕の大好きな人達が、いつまでも幸せであるように願い、そんな社会に向けて僕にできることを積み重ねていきたい。僕の望む平和は今、始まったばかりだ。